

| | | | | |
|---------|-------------------------|------|-------|-------|
| 氏名(本籍) | 季 | 活 | 雄 | (英 国) |
| 学位の種類 | 文学博士 | | | |
| 学位記番号 | 博甲第693号 | | | |
| 学位授与年月日 | 平成元年7月31日 | | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第1項該当 | | | |
| 審査研究科 | 歴史・人類学研究科 | | | |
| 学位論文題目 | 鬼の研究 ～鬼の系譜論的な考察と民俗像～ | | | |
| 主査 | 筑波大学教授 | 文学博士 | 宮田 | 登 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 文学博士 | 牛島 | 厳 |
| 副査 | 筑波大学助教授 | | 高桑 | 守 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 文学博士 | 田中圭 | 一 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 文学博士 | 荒木美智雄 | |

論 文 の 要 旨

本論文は、日本の鬼に関する民俗学的研究であり、従来の歴史的研究に加えて、地域社会に展開する鬼信仰をとらえつつ、鬼の全体像を把握することを意図している。そのために、歴史的文献に記述されている「鬼」を系譜的に整理する一方、秋田県男鹿半島のナマハゲ行事を分析し、民俗社会における鬼の本質を究明した研究である。

本論文の内容は、序章、第一篇2章、第二篇4章、結論の構成で、400字詰原稿用紙666枚から成っている。

序章においては研究史を整理している。先行研究は系譜論的アプローチと民俗的アプローチのものに分類される。前者の場合、中国の漢字文化が伝来する以前の「鬼」要素の存在について十分に把握されていないことから、日本的「鬼」と大陸的「鬼」の習合のプロセスについて明らかにされていないこと、後者の場合、日本の民俗社会における異人に相当する鬼の態様が明示されていないことから鬼の民俗像が把握しにくくなっているという問題点が指摘されている。

第一篇「鬼の成立と系譜－歴史的アプローチ」の第一章では、記紀成立期における「鬼」の概念を検討している。記紀をはじめ『風土記』『万葉集』などに表現されている「鬼」の存在は、当時日本の知識層が漢字文化を受容するにあたり、中国のクエイ＝鬼をモノノケとしてとらえていたこと、そして「鬼」の字は、平安時代以降に多用されていることなどを明らかにしている。第二章では、日本のモノと中国のクエイがともに「鬼」に統合された結果、「鬼」の字に包括された諸要素が多様に成長変容した状況を究明している。そしてそれは、地獄系統の鬼、靈魂系統の鬼、周辺民系統の

鬼の三分類が可能だと説明している。とりわけ浄土を説く佛教が内包する地獄思想の高揚に伴ない、地獄の鬼のイメージが強調され、日本文化の中に定着した。そのことにより、残酷で人間を責め苦しめる鬼のイメージが印象づけられ、周辺民系の鬼が薄れて悪鬼が前面に表現されたとする。以上のような系譜論的背景をもつ鬼の多様性は、具体的な鬼について一つ一つ検討される必要があるが、本論文では具体的事例として追儼行事の変遷をたどった。追儼の鬼は、牛角、虎皮、鉄棒といった鬼の定型を示し、これが民間信仰の鬼のイメージに影響を与えるという理由にもとづいている。

第二篇「地域社会と鬼の民俗像」では、まず第一章において秋田県男鹿半島のナマハゲ行事に焦点を絞り、地域社会における鬼の民俗像を検討した。とりわけ男鹿半島の昔話、年中行事を中心に、さらに近年のテレビ番組や学校行事などの影響を考慮しながら、鬼のイメージを追究した結果、来訪鬼というナマハゲの鬼と一般的な「桃太郎」などの鬼とが一体化されて理解されていることが指摘されている。第二章は、男鹿半島の脇本と相川の2つのフィールドを中心に資料を収集し、昭和10年代に成立したナマハゲ行事の関係資料と比較しながら、当該地域のナマハゲ行事の変化の様態を把握した。そしてナマハゲの鬼と地域住民の日常生活との有機的なつながり、時代・社会の要請に対応したナマハゲの鬼の存在意義について考察している。第三章においては、フィールドの素材として、真山神社柴灯護摩神事の鬼をとり上げ、ナマハゲの鬼と比較し、類似性、異質性を論じている。真山神社の鬼には、幸運を与えるマレイト系統の鬼と地獄系統の鬼の二面性が認められ、両者が渾然一体化している。実態の上では、ナマハゲの来訪鬼と節分・追儼に出現する邪気との融合・混同とがみられ、これは昭和40年ごろに顕著となったという事実を指摘している。そしてその背景には、民俗の変化に対応する鬼の可変性が存在するという。一方鬼は系譜的に多様性を示すのであり、恐ろしい仮面の鬼は、地域社会の民俗コンテクストにもとづいて、災厄をもたらすと同時に厄払いの守護霊にもなる点を説明している。

男鹿半島のナマハゲ行事の調査分析によると、来訪鬼とみなされている鬼は、地域社会においてもっとも必要とされる神格である。恐ろしい形相を呈し乱暴にふるまっても、鬼は地域社会住民の要望通りになる。とくにナマハゲ行事が地域の未成熟な成員の教育に用いられるのもそうした鬼の性格によるわけである。同時に節分の鬼も地獄の邪鬼を演じながら、豆撒きの対象として追放される対象になることによって、地域社会の無病息災が可能になる。こうした民俗社会の必要に応じて鬼の役割が変化する点に、鬼の可変性の特徴があると論じている。第四章では、江戸時代のナマハゲ行事の実態を、菅江真澄の史料を中心に再構成しようとしている。従来柳田国男がとり上げていた真澄関係資料のほかに、秋田県下に数多くの近世史料が発見されているので、それらを収集整理しつつ、男鹿半島の来訪鬼の性格を浮かび上げさせている。

結論では、本論文では①鬼の系譜的な全体像、②日本人のもつ鬼意識の形成過程、③鬼の民俗像とその本質という3つの課題に迫ろうとしたが、かならずしも十全を期し難かったとして、今後の展望を試みている。民俗学的研究の上では、年の境目に来訪する来訪鬼が大きな比重を占めており、本論文でも第二篇で男鹿半島のナマハゲ行事を分析した。その結果鬼の多様性と可変性を抽出し得たのであるが、同じ来訪鬼でも、愛知県北設楽郡の花祭り、大分県国東半島の修正鬼会の事例など

があり、さらに比較検討する必要がある。今日の感圧的な鬼のイメージの以前の型をとらえることが、重要であり、今後比較研究をさらにすすめて深化したいと結んでいる。

審 査 の 要 旨

本論文は、従来の鬼の研究が、系譜論的な研究に傾いているのに対し、実際の民俗行事の中の鬼のイメージが、地域社会においてどのように機能しているのか、現地調査を実施することによって、鬼の民俗像をとらえようとする意図がありその点十分に評価できる。系譜論的な研究にしても、来訪鬼系と地獄鬼系のほかに周辺民系の鬼を別立てとして分類しており、その多様性を提示している。現地のフィールドワークの作業については、とくに地域の子供たちを被調査者にして、テレビや出版物などの影響、学校教育からの介入などを考慮にいれ、民俗変化の観点を導入しつつ、目標に迫ろうとした努力が認められる。またこうしたナマハゲ行事のインテンシヴな実地調査は、本論文がはじめてであり、この点も評価できよう。

しかし筆者が意図した課題については、今後さらに検討されるべき問題点がある。その第一は、系譜論的研究において、中国の鬼が日本に受容された時期と、日本の本質的部分であるモノノケの性格とが、いかなる契機で習合し得たのかという説明である。第二は、文献の上で定着した地獄系統の鬼のイメージが、仏教的行事として民間に伝播するプロセスと、筆者が分析したナマハゲ行事の鬼とが接合する部分に対しての説明である。第三は、本論文の構成において、第一篇と第二篇の脈絡の上で整合性にややかけているところがあり、そのため両者を結びつけようとして筆者がとり上げた追儺行事の分析が十分に生かされていないといううらみもある。

筆者に残された課題の要点は以上の通りであるが、本論文は、外国人による日本研究の視点から、地域の民俗文化に対し民俗学的方法をもって取り組んだ野心的な試みであったこと、また約2年間、現地調査を継続し、日本文化の深層に潜む、中国の鬼とは異質の部分に注目し、それを抽出しようとしたこと、そうした成果は十分に評価できるものであり、今後の研究の充実が一層期待できるものといえる。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。